服部英雄氏「昭和30年代・濃尾平野と周辺の中世城館」を読んで
－城跡の過去と現在－

髙田　徹

はじめに

近時、九州大学の服部英雄氏が「昭和30年代・濃尾平野と周辺の中世城館」(註1)を著された。服部氏は名古屋市のご出身で、少年時代以来、今に至るまで「城(城跡)探訪好き」の研究者として知られている。内容は服部氏が中・高校生時であった昭和30年代、尾張・三河・美濃国の城郭跡を探訪した際に撮影した写真約400枚と図面（ご自身は見取り図と称されるが、中には縄張り図と呼んで差し支えない図もある）約90点を集成されたものである。これに空中写真やその他図面等を参考資料として、付け加えられている。

服部氏から筆者の元へ抜刷をお送り頂いたが、頁をめくるたびに興奮を隠せなかったというのが第一の感想である。そこには初めて見る光景が多かったが、中にはなんとなく見たことのあるような光景、懐かしく思われる写真も少なくなかった。なんとなくというのは、恐らく一枚の写真の光景に筆者の初見部分とそうではない部分が入り混じっているからではないかと思われる。

濃尾平野の平地城郭については、絵図や地籍図によって輪郭が確認できるものが多い。しかし服部氏の写真は立体的であるから、インパクトがかなりある。昭和30年代の城郭の光景は、近代、さらには近世に遡る可能性も高いだろう。それは古城の原風景と呼んでも差し支えないのではないだろうか。

濃尾平野の一角で育ち、昭和50年頃から城郭に興味を持つようになった筆者が、最初に訪ね出したのも自宅近くの城郭跡だった。昭和30年代後半から昭和40年代前半にかけて、尾張地方では圃場整備が進み、多くの平地城郭が姿を消していった。したがって筆者が見ることできた城郭遺構は極めて少なかったが、後の破壊状況を顧みればまだ幸いであった。小学生であった筆者もカメラを持って城郭跡を訪ねたが、悲しいかな、遺構を見る目がなく（石碑を撮影して満足していた）、何枚も写真を撮ることが金銭的に厳しかった。

したがって昭和30年代、未だ中世城郭にほとんど目が向けられていない状況下、全国的に見れば無名な城郭跡を撮影し、記録を残してくれた当時の服部少年、そして少年時代の熱き思い出を公表してくれた研究者服部氏には心より敬意を表したい。実際、かなり珍しい写真も収録されており、今後各方面で利用されるのではないかと思われる。

氏の撮影した写真には堀・土塁等の遺構を間近で写したものがある一方、城郭跡を少し離れた場所から撮影したものが含まれている。個別の遺構写真も貴重ながら、城郭跡の立地や周辺景観がわかる写真は一層資料価値が高い。

ただ写真それぞれに解説を加えられているわけではないから、この地方に馴染みがない方からすればややわかりにくい部分があるだろう。服部氏自身もすでに記憶にない部分があると聞いている。そこで橋渡しといっては僭越であるが、筆者のわかる範囲で、かつ興味のある点に偏ってしまうけれども、若干の解説を試みるとしよう。

（1） 清須城(清須市)

服部氏の清須城に関わる写真は９枚収録されている。このうちの１枚は天守台北側に水田が一面広がっている様子を写している。筆者が初めて訪れた昭和 50 年頃には、すでに田は埋められていた。今は駐車場となっている(写真１の現状写真参照。適宜服部氏撮影の写真と比べて頂きたい)。

写真１　五条川堤からみた天守台

五条川堤から天守台跡へ進む入口の左手(南側)には東を向いて「清洲古城趾」碑が建っている(写真２参照)。今は石碑がブロックのような石を積んだ基壇上に建っているが、近時の整備の結果である。筆者が初めて訪れた昭和 50 年頃に基壇はなかったが、ほぼ同じ位置に石碑はすでに建っていた(註 2)。

写真２　天守台入口の石碑

服部氏による写真を見ると、天守台へ進む道の右手に碑が建っていて、しかも碑の文字は西側を向いているように見える(註 3)。つまり石碑の位置は昭和 40 年代前半にも移動していた、ことになる。

天守台跡には二つの石碑が建っている。一つは「右大臣織田信長公城跡」と題し、もう一つは「清洲城墟碑」と題している。前者は五条川川床から引き上げた、旧清須城石材を転用し、弘化４～５年に建設された(註 4)。後者は文久２年に林恪によって建設されている。撰者は津藩の斎藤拙堂、書は野田可復である。さすがに天守台上の石碑の位置は、今も服部氏の写真とほとんど変わりない。

写真３　天守台上の石碑

強いて言えば周囲の植生が変化していることであろうか。ただし、近代においては天守台上は鬱蒼と木々が茂っていて、今日から

では想像しがたいほどであった(註 5)。また石碑の南側には祠が建っているが、祠の下には近代には玉垣が設けられていた。玉垣は、今存在しない。

写真４　松蔭神社跡から見た堀跡

写真５　松蔭神社跡の石碑

写真６　外郭堀跡の水田

写真７　外郭堀跡の段差(右手が城外)

服部氏は、本丸南方にあった外郭の堀跡も撮影している。それは「御土居松」から東側にあった外郭堀を写した写真である。「御土居松」とは清須城外郭の南側、馬出(山王口)近くに生えていた松である。当時松蔭神社境内にあり、樹齢 500 年であったという(註 6)。

服部氏の写真によれば宅地と宅地の間に、一段低くなった堀跡の田が続いている。筆者は以前「御土居松」を訪ねたことがあったが、場所がよくわからなかった。今回改めて踏査すると、玉垣に囲まれた基壇上に「清須城土居之趾」と題する石碑が残っていた。この石碑は昭和３年２月 11 日に建設されている。石碑に隣接して存在した「御土居松」はすでに存在しない。かわりに「松蔭神社跡」の碑が建っている。碑によれば松蔭神社は山神社と合祀し、松山神社となり、遷座しているらしい。碑の銘は昭和 41 年 10 月だから、その頃合祀・遷座したと見られる。「御土居松」もその頃には枯れていたのだろうか。

服部氏は『愛知県史蹟名勝天然紀年物調査報告』３所収写真を参考に転載しているが、

その写真は右上に「御土居松」の写真を合成しているため、一部が見えにくくなっている。同じ写真は『愛知県史蹟名勝天然紀年物』(註 7)に収録されているが、こちらでは「御土居松」の写真が合成されていない分、すっきり景観が写っている。

服部氏の写真の手前に写るのは松蔭神社の玉垣であり、大正 11 年に神域を拡張した際に設けられたもの（註 8)と推定される。ただし『西春日井郡誌』所収の写真と比べると、玉垣に囲まれた範囲はずいぶんと狭い。同書では境内敷地を 46 坪と記しているから、現状はかなり狭くなっている。今は鳥居も存在しないし、上部に巨大な松が植わるだけの広がりもない。

服部氏が撮影した写真と同じ位置に立って気づいたのは、繁茂状況こそ異なるものの後方に見える樹叢は今も存在していることである。樹叢は八剣社に相当する。そして八剣社方向に続く堀跡は宅地・天王公園、そして田になっているが、地割や高低差を今に残している。堀跡に建つ宅地は近年建設とおぼしきものもある。

付近は近代には早く清須城の堀跡を止める一角として認知されながら、今は忘れ去られているかのようである。服部氏は小幡城(名古屋市守山区)に関して「すくなくとも大正時代まで、の愛知県では、枢要な城郭遺跡と認識されていた。どういう経緯でいとも簡単に破壊されたのかは、また調査してみるべき課題である」(註 9)と述べている。清須城ではいまだ堀跡としての痕跡は残っているが、堀跡としての意識が何故忘却されたのか、忘却させる要因が奈辺にあったかは同様に考究すべき課題と言えるだろう。

なお田や地割が残る今なら、保存処置も不可能ではないだろうし、少なくとも発掘調査の対象とされることを望みたい。また地元の住民の方々にも、身近な場所に堀跡が残っているという現実を認識してほしいと思う。

（２） 小田又六城(名古屋市西区坂井戸)

小田又六とは、小田井城主織田信張のことである。小田井城は小田又六城から西方約２㎞の場所にある。詳細は不明ながら、小田井城主が領有する城郭であったのだろうか。

この城跡は小田井城と区別するため、「坂井戸城」と呼ばれることがある(註 10)。

写真８　津島神社東面(後方は庄内川堤防)

城跡があったとされる坂井戸付近は筆者が高校生の時に毎日通る道であったことから、何度か付近で聞き取りを行ったこともあった。しかし城跡に関する伝承等を得ることができず、筆者にとっては全く謎の城跡であった。服部氏も引用する『西春日井郡誌』には「現今殆ど宅地(山田市兵衛初め十名)となれり。坂井戸の名称は此の城の井筋の意味にして今も尚井筋と称する地あり」とあるが、皆目見当がつかなかったのである。

ところが服部氏の写真によれば、現在の津島神社境内付近に井戸があったことを明らかにしてくれる(写真後方に庄内川堤が写る)。服部氏による見取り図によれば、以前は津島神社が現境内の南西あたりに鎮座していたこともわかる。そして『西春日井郡誌』に言う「山田市兵衛宅初め十名」の宅地を割り出し、城跡を見事に比定している。服部氏の比定によれば城跡は、薬師寺西側一帯となる。妥当な見解であろう。

写真９　小田又六城跡あたり(南側から)

ちなみに『愛知県中世城館分布調査報告(尾張編)』(註 11)では、城跡を現在の中京自動車学校付近に比定しているが、河川敷であり、明らかな誤りである。

津島神社境内には昭和 44 年銘の遷座記念碑が建っている。したがって昭和 44 年頃、服部氏によって写された井戸は埋められ、神社が遷座し、今の姿になったと考えられる。

(３)平田城(名古屋市西区城町)

平田城は服部氏の写真には、棕櫚の木に囲まれた中に井戸枠を写している。井戸枠は今でも残っているが、伸びすぎた草に覆い隠され、わかりにくい状態になっている。近世以降に焼かれた素焼きの井戸枠である。井戸は現位置よりも西側にあったが、耕地整理の際に移動し、現在に至っている(註 12)。服部氏が写しているのも、耕地整理後の写真である。城跡一角は何も残っていないが、旧集落の中に温室が広がり、都市化していないのが幸いである。

写真 10　平田城付近

←写真 11　平田城の井戸枠

（4）九之坪城(北名古屋市九之坪)

服部氏の写真は城跡の中央部から、南東方向を写している。遠方に写る木が茂った部分は、山の神であり、今も同位置にある。服部氏の見取り図によれば、「柿」の木の東に「無銘の石」を記している。写真には柿の木が写っているから、石も写っているはずなのだろうが、よくわからない。少し奥の方に草地が横方向に広がっているが、曲輪跡の端部であったのであろう。

写真 12　九之坪城の「石」を南西から見る

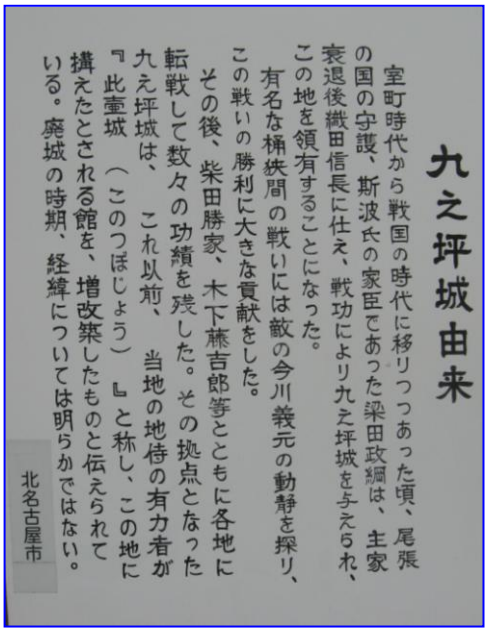
服部氏の見取り図によれば、田の中に畑となった城跡がそのまま残っていた様子が記されている。明治期の地籍図からも、全く同様の景観であったことが知られる。

写真 13　祟るという「石」

ただ服部氏は城跡に「現在は施設が建設されている」、「当時、石はあった」と記しているが石は現存している。石は以前直立していたとか、井戸跡を示すとか、雪の日でも雪が積もらないとか、の伝承を聞いている(註 13)。

施設 (ふれあいの家高齢者活動センター)は城外の南東付近に建っているから、城跡の場所とは別である。

写真 14　施設前の石碑



写 真　15　石 碑 脇 の 解 説 板

ただ施設前には「九之城址」碑が建つ上、碑の脇に建つ解説板にも何ら城跡の位置について触れていない。これでは碑の建つ場所が城跡と捉える方が普通である。せめて解説板に「石碑の場所から北西 50m付近が城跡であった」とでも記していれば、誤解は生まれない。石碑を建てるのは結構だが、誤解を生じさせる源になっては困りものである。

服部氏の写真は、城跡の旧観を伝えている点で貴重である。触れると祟ると言われる「石」の周囲を除いて、曲輪面は削り込まれ、低く均された。そして道路が付き、民家が建ち、すっかり周辺の景観は変わってしまった。ただ畑となった一角に、「石」周囲だけが高くなって残っている。柿の木はすでになく、替わって蜜柑の木が植わっている。

筆者は小学５年生の時、初めて九之坪城を訪れた。小学校の先生から道を教えてもらってやってきた。先生は「「石」のある場所は天守閣のあったところだ」と説明してくれたのを覚えている。いずれにしろ九之坪城は自ら意識して最初に訪れた中世城郭跡であった。昭和 50 年頃だったが、すでに「石」周囲の曲輪面は削り込まれていた。

（５）鹿田城(北名古屋市鹿田)

二つあった鹿田城の内、大口左京進の居城である。

服部氏の写真に写るのは、堀跡と伝えられていた池跡あたりを南西方向から写している。服部氏はかつて西に流れる川(堀跡)があったこと、それが池になったことを伝え聞いている。筆者も土地所有者から約 25 年前、同様の聞き取りを行っている(註 14)。池は埋められていて、当時すでに跡形もなかった。

↑写真 16　池跡付近を南西側から見る

←写真 17　牛舎付近を南西側から見る

当時の池跡には離れが建っていたが、今回訪れると離れも建て直されていて、すっかり旧状が変わっていたのに驚かされた。堀跡の池は城の北側を区画するものであったはずだから、城跡の主体部は当然南側に存在していた。

ところで名古屋市博物館の山田伸彦氏(鹿田に在住)の教示によれば、池跡の南西部に建

つ牛舎付近が城跡と、強く集落内部で認識されているという。牛舎のあった部分の西側は、水路となっていて、堀跡を彷彿させる。

写真 18　石蔵山を北西方向から見る

（６）熊之庄城(北名古屋市熊之庄)

熊之庄城の位置については、『西春日井郡誌』以来字城屋敷内の北西部、青山家付近に比定されている。しかし筆者は地籍図の読み取りから、その場所から北へ約 50m、字大畦に存在した畑地部分に比定している(註 15)。字大畦に城跡が存在した点とみる見解は、今も訂正する必要はないと考えているが、近接した位置に今ひとつ城跡が存在したとみる余地もある、とも思う。

さて服部氏は、青山家の北西隅にあった「石蔵山」を３枚写している。『西春日井郡誌』には「今は石蔵山ともいひ山林となれり」と記している。明治期地籍図でも、石蔵山部分は宅地の隅に藪となって表れている。石蔵山には虚空蔵菩薩の石像が祀ってあった。

筆者が訪ねた昭和 50 年頃には、すでに現在と同様の景観であり、「石蔵山」は存在しなかった 。今回、所有者の方に聞いて見たが、代替わりで昔のことはわからないが「石蔵山」付近には山神を祀っていたと教示を受けた。また近隣での聞き取りでは「石蔵山」は触れると祟る場所である、との話を聞いた。また集落内で旧庄屋をつとめた堀部家が城主後裔であったとの話も聞き取っている。熊之庄城の城主は、溝口左京進と伝えられているから、確認が必要ながら今回は果たしていない。

（７）井関城(北名古屋市井瀬木)

服部氏の写真は、２枚あり、１枚は堀跡から北側を撮影し、もう１枚はほぼ同じ場所から西側を向いて撮影している。いずれも中央に写った道は堀跡である。北側を向いて撮影した写真の左手、西側を向いて撮影した写真の右手が、主郭部にあたる。

写真 19　　北側から見た井関城跡

写真 20　堀跡から東側を見る

堀跡は地籍図によれば、最も広い場所で約 25mあった(註 16)。写真ではちょうど堀跡が埋められたばかりで、側溝を設けている最中である。筆者は中学１、２年生時、堀跡の上を通学路としていた。舗装された道路敷きになって久しく、堀跡の面影を探るのは難しい。地籍図によれば川が折れ曲がっていたことがわかるが、今はその面影もない。

井関城は恐らく佐々成政出生の城である。にもかかわらず、石碑はおろか解説板の一つも建っていないのはなんとも寂しい限りである。

（８）小田井城（清須市）

小田井城の主郭部は、現在 22 号線古城交差点付近にあった。しかし以前は田の中に主郭の畑地が残っていた。城跡には縦書きの「小田井城址」石碑が建っていたが、旧位置から約 400m東方にある城址公園に移され、現在に至っている（註 17）。

写真 21　東側から古城交差点方面を望む

服部氏の写真では名鉄犬山線の西側にある田の中に、ぽつりと石碑が建っている様子がよくわかる。周囲には堀跡の田が巡っていたはずだが、そこまでは読み取れない。城址公園に移された石碑の脇には今ひとつ石碑が建っている。「小田井城趾」と横書きされた石碑で、昭和 38 年 10 月に建設されている。縦書き石碑が現位置に移された際、同時に建設されたと考えられる。建立者として名を連ねるのは「鴻池組・三井建設・滝上工業・大木組・日本道路」となっている。確認が必要ではあるが、建立者は城跡を開発した関連企業ではなかったのか。

写真 22　城址公園の石碑

保管場所がなくなり石碑を他の場所に移動させたのは、当時としては致し方ない処置であったかもしれない。ただし石碑の場所が城跡ではないことを説明し、誤解を与えない処置は計るべきであった。

仮に昭和 38 年時、後に誤解を増殖させかねない「小田井城趾」碑を開発企業側が新たに建てていたとすれば、石碑移設に関わる問題は決して小さくないであろう。穿った見方をすれば城跡破壊の免罪符に、城址公園が造られたようにも思われる。

いずれにしろ当時の記録や記憶を掘り起こし、一連の経緯を明らかにしておく必要があるだろう。これは決して過去の問題ではない。現に先に見た九之坪城においても同様の建碑＝城跡としての認識が定着しだしている。

(９)大留城(春日井市大留町)

大留城は近年道路建設により一部が破壊を受けたが、子安神明社北側に堀・土塁を残している。現在も残る堀は、さらに西側に伸びていたことが断面部の状況から判明する。問題はどこまで伸びていたかであるが、筆者は以前地籍図を通じて、子安神明社境内を中心とした約 50m四方の規模を曲輪として想定･比定したことがあった(註 18)。

写真 23　建設中の道路から見た子安神明社裏の堀跡

ところが服部氏作成の見取り図によれば、堀・土塁は子安神明社境内よりも西側に広がっていた様子を伝えている。改めて地籍図をみると、確かに堀・土塁に該当しそうな藪地が存在する。筆者もこの藪地を城域と捉えていたが、現在の都市計画図上に比定する際、縮尺・比定位置を誤った模様である。

改めて検討すると子安神明社を中心とした約 80m四方の方形の曲輪があり、さらにその東側にもう一つ曲輪(恐らくこちらが主郭)が存在したと考えるべきである。

なお服部氏からは後日、160 頁の(２)写真は土塁、161 頁の左上の写真は井高川、161 頁の右上の写真は堀跡と記憶している旨、教示頂いている。

(10)稲葉地城(名古屋市中村区稲葉地町)

庄内川に架かる新大正橋の東側、現在新明社境内が城跡である。戦前は神社の周囲に堀跡が残されていたが(註 19)、今は宅地・道路となっている。服部氏は城跡を３枚撮影しているが、このうち１枚は庄内川堤防上から東側にある城跡を写している。背の高い松に囲まれた境内であるが、『名古屋の名所旧積』で堀跡として写されているのは境内南側、松が植えられた付近である。したがって、服部氏による写真で松が見えるあたりに堀跡があったと考えられる。

なお服部氏も写している「稲葉地城趾」碑は現存するが、やや位置を移動している。

(11)古渡城(名古屋市中区橘)

古渡城は現在東別院境内となり、特に遺構を残していない。筆者が少年の頃、本堂の南東部に「古渡城趾」碑が建っていた(註 20)。ところが昨年同寺を訪れたところ、石碑は本堂の南西側、山門近くに移動していた。

写真 24　山門脇に移動した石碑

改めて服部氏が撮影した写真を見ると、本堂の南東方向のようであるが、かなり本堂から離れた場所に石碑は写っている。さらに昭和 13 年発行の『名古屋の名所と旧蹟』所収の写真によれば、石碑の基壇には石が積まれ、背後には板塀が連なっている。明らかに服部氏が写した石碑の位置とは違っている。石碑が建てられたのは大正７年３月だが、少なくとも４回は境内で場所を移動していることが知られる。

(10)御器所西城(名古屋市昭和区御器所町)

現在尾陽神社境内が御器所西城跡である。服部氏の写真は５枚あるが、このうち(２)と題する写真は南東方向から境内を撮影している。本殿は昭和 20 年の空襲で焼失し、昭和 45 年に再建されている。服部氏の写真にはまだ本殿のない頃の境内が写されている。特に注目したいのは境内に東側に、見事に堀跡が写っている点である。現在付近はマンション駐車場になり、全く面影がない。ただし服部氏も見取り図に記している堀の北側延長部、クランク状に折れた部分は境内と民家との境界部に今も残っている。

(11)長久手城(愛知郡長久手町)

長久手城は、長久手古戦場の血の池西方にあった中世城郭である。文化６年に「加藤太郎右衛門忠景宅趾」碑が建てられた。

城跡は昭和 50 年代前半の区画整理により消滅した。城跡の一角

写真 25　西側から見た観音堂

写真 26　石碑

に建てられた観音堂脇に、石碑も移されている。

筆者は区画整理後に長久手城を訪れているから、それ以前の姿を知らない。服部氏の

写真によれば高まりの上に石碑は建っていたらしい。また城跡の遠景も撮影されているが、南側か、西側からの撮影と考えられる。遠景写真について服部氏にお聞きしたところ「松の木のあったところが碑の場所なので、左側のどれかで当時既に土採りされていた山になります(たぶん中央)」とのコメントを頂いている。

(12)小口城(丹羽郡大口町)

服部氏が写した写真は３枚ある。１枚は「小口城址」碑を写したもの、１枚は主郭部を南東方向から撮影したもの、もう１枚は樹木が鬱蒼と茂り、場所の見当がつきかねる(服部氏に後日主郭内であると教示頂いている)。

小口城跡の主郭部には平成８年に模擬櫓・模擬土塀等が建設され、すっかり旧状を失った。

写真 27　南東から見た主郭

写真 28　石碑

写真 29　小口神社の土塁

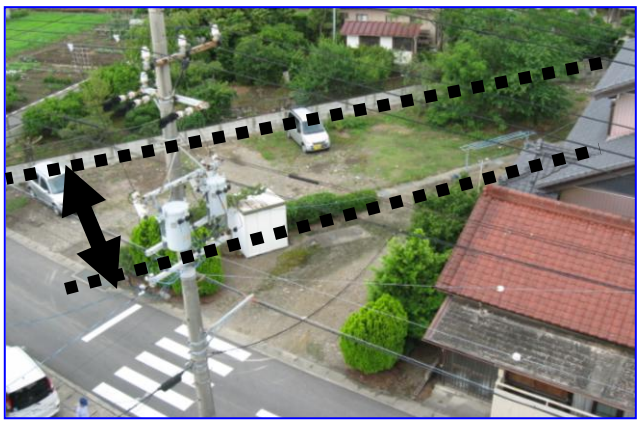


写真 30　南西部に残る堀跡

服部氏の写真に写った主郭裾の堀跡(田)は、公園整備されてしまっている。以前は主

郭上にあった石碑は、南側裾の入口に移動させられている。ただし小口神社境内には土塁が残るし、小口神社の南側にはかつての堀跡が帯状の地割となって残っている(註21)。他にも地割に堀や道の痕跡を止めているところがある。

平成22年には大口北小学校跡地が発掘調査され、堀跡が検出されている。今後の保存・整備がどのようになされるか注目される跡である。

(13)大草城(小牧市豊田市元城町)

大草城跡は現在山林となり、主郭跡に石碑が建っている。大草城の縄張りについては、筆者は丘陵に切り込むように堀・土塁を設けた方形城館であったと考えている(註22)。堀切は今も一部残るが、所有者からの聞き取りによれば以前に裏の山が崩れ、かなり浅くなっているとのことであった。

服部氏が撮影した写真は6枚ある。具体的な撮影場所がわからないものもあるが、注意されるのは見取り図で城域とされる範囲、および断面略図である。大草城については井上博史・中山春義氏による調査が知られている(註23)。同氏らの図では主郭部の背後(裏山)に曲輪があり、さらに背後(西側)に大堀切があったと主張されている。裏山は崩れているにしろ、現状では曲輪があった痕跡はない。縄張り上、背後を掘り切っていて連絡口も想定できないのだから、曲輪はなかったと考えるのが自然である。さらに背後に大堀切を設ける必要性も見当たらない。そこで筆者は井上・中山両氏の縄張り図および解釈を否定的に捉えていた。

ただ以前の姿を知らない、見ていないというのは、反論上多少の支障がある。今回公表された服部氏の見取り図は丘陵に切り込んで造られた縄張りを的確に表記し、かつ裏山と裏山背後に特段遺構の広がりを記していない。服部氏の見取り図は筆者の評価と符合するものであり、自説を補強してくれた。

(14)桜城(豊田市元城町)

服部氏は挙母山城(佐久良城)として挙げる。現在桜公園内部に櫓台のみが残っている。服部氏の写真は3枚あり、1枚は西側から撮影した櫓台、1枚は北西側から見た櫓台、そしてもう1枚は櫓台上から撮影した写真と考えられる。

このうち西側から撮影した写真には、なんと右下に土塁の痕跡が写っている。

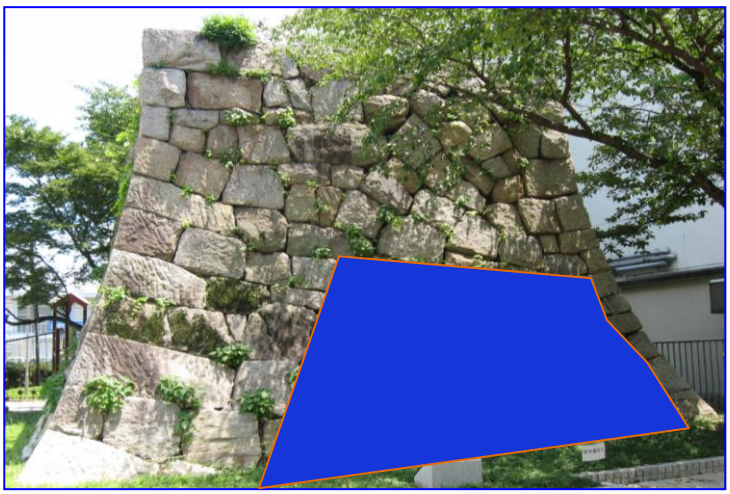


写真31　桜城櫓台西面
(※塗りつぶし部分は服部氏写真に写る土塁痕跡部分)

現在の櫓台は単独で残っていて、上り口もない。本来櫓台の西側と南側には土塁がつながっており、土塁上から櫓台上へ移動できたわけである。かなり崩れているが、服部氏の写真にははっきり土塁の痕跡が認められるのである。もちろん今は、土塁の痕跡など見当たらない。

近年、桜城櫓台を撮影した過去の写真の集成が行われているが(註 24)、服部氏による写真は撮影時期・アングルとも異なっており、今回新たな写真資料が加わったことになった。

おわりに

はなはだ偏った城郭に触れたのみになった。他にも触れておきたい城郭は多い。例えば市場城(豊田市市場町)を写した服部氏の写真は、ずいぶん見通しが効く城跡を写している。しかし昭和 60 年頃、筆者が訪れた当時、足の踏み入れ場もないほど草木が生え、荒れに荒れていた。今は綺麗に草が刈られ、夏場でも十分踏査できるほどである。城跡の景観の変遷にも驚かされる。

楽田城(犬山市楽田)では、服部氏は校庭拡幅以前の写真を撮影している。拡幅以前は校庭南東隅に土塁があったが、今はない。日本初の天守があったと伝えられていたためか、楽田城は比較的戦前・戦後の写真が啓蒙書類にしばしば登場する(註 25)。実は筆者は啓蒙書類に出てくる中世城郭の画像を、なんとか集成し資料として活用できないかと考えているがなかなか果たせない。例えば楽田城ならば学校の一角に残っていた土塁が如何に破壊されていったのか、城跡の周囲の景観がどのように変貌したのかが、写真の集成によって計時変化がわかりやすく捉えられる。

いずれにしろ今回のように服部氏によるまとまった写真が公表されると、今後一層画像資料をどのように集成・活用していくかが次なる課題となるように思われる。写真は城跡の一面を写したものに過ぎないが、平面図よりもインパクトを与えてくれる時もあるし、当時の風俗・空気を伝えてもくれる。一方で年数の経過は、撮影者自身の記憶を不確かにする点があるだろうし(註 26)、どこまでコメントを付けるかはなかなか難しいと推察する。写真は有益な資料であるが、取り扱いが難しい資料でもある、と一面で感じる。

ひょっとしたら服部氏が撮影していたような写真を、まだどなたか秘蔵されているかもしれない(註 27)。服部氏の写真公開を機会に、同様の写真資料が積極的に公開されるようになればありがたいと思っている。今回の服部氏の写真公表を一番喜んでいるのは、筆者なのかもしれない。服部少年の写した現場に、現在の筆者が同じように立ち、現状と過去を比べて見るというのは実に楽しい作業であった。すでに筆者は城郭を写した絵葉書と同位置に立ち、比較検討する作業を行っているが(註 28)、全く同様のおもしろさが感じられた。

そして極力同じ位置、同じ目線に立って城跡を観察することで、忘れかけられていた遺構の発見、痕跡の発見につながることもあるだろう。多くの尾張の平地城館が姿を消

したといっても、未だ遺構や痕跡を残す城郭跡は確実に存在する。消滅したと勝手に決めつけられ、判断されている城郭跡も存在するのだが(註 29)。

城郭跡の残り方、残り具合も様々であり、それぞれのパターンがあることをもっと強く意識する必要はあるはずだ。

それにしても多少の勘違いや見落としがあるとしても、服部少年の的確な見取り図には驚かされる。欲を言えば、もっと早い機会に写真と共に公表して頂きたかったと思う。服部少年は自らの踏査と結果をどのように位置づけていたのだろうか。その辺りは、お聞きしていないが、当時は中世城郭が今ほど市民権を得ていなかったし、中世城郭を積極的に保存しようとする意識も、破壊に対する危機感、そして罪悪感もほとんどなかったと思われる。もちろん、見取り図や写真を紹介できるような媒体(今日で言えば論文・報告・ウエブサイト等)もなかった。したがって、もっと早い機会に、と思うのは筆者らの勝手な思いでしかない。50 年近く眠り続けていた写真・見取り図は、まるでタイムカプセルのようである。

今回尾張地方の城跡が、昭和 40 年頃を境に大きく変貌したことを改めて認識させられた。それ以上に再認識したのは、石碑が意外に動いているという点である。石碑を動かすのはそれほど難しいことではないが、筆者などは比較的固定的な印象が強かった。それだけに写真上で、石碑の移動を再確認できたのは収穫であった。それは石碑が決して定点にはならない、ということでもある。

末筆ながら今回膨大な写真を公表された服部英雄氏には改めて御礼申し上げたい。

註

1 服部英雄「昭和 30 年代・濃尾平野と周辺の中世城館」『比較社会文化』16(九州大学大学院比較社会文化学府、平成 20 年)。なお「九州大学学術情報リポジトリ(QIR)」https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/8012でも公開されている。

2 小和田哲男『国盗り物語の旅』(サンケイ新聞社出版局、昭和 47 年)123 頁所収の写真が筆者の記憶に符合する状態である。

3 清洲町史編さん委員会『清洲町史』(昭和 44 年)82 頁所収の写真は、服部氏撮影の写真に近い。

4 註 3 文献 81 頁。

5 註 3 の巻頭写真(原典『名古屋温故会写真集』)による。

6 岡田鎮太「清須城跡」(愛知県文化財保存振興会『郷土資料愛知の史跡と文化財』、泰文堂、昭和 37 年)

7 愛知県史蹟名勝天然紀年物調査会『愛知県史蹟名勝天然紀年物』(昭和 2 年)。同書の写真説明には「南方外濠阯比較的ヨク旧時ノ面影ヲ存ス、図ハ西春日井郡新川町村社松陰神社附近ヨリ東方ヲ望ミタル外濠ノ遺蹟ニシテ今ハ多ク水田トナレリ。ソノ左即チ北方ハ土居ノ地ニシテ行当リニ近ク松杉椋欅等ノ老木繁茂セル所ハ村社八剣社ナリ。」とある。

8　愛知県西春日井郡『西春日井郡誌』（大正 12 年、昭和 63 年にブックショップ「マイタウン」より復刻）

9　註 1 文献 122 頁。

10　柳史朗「坂井戸城」（『日本城郭全集』７、人物往来社、昭和 41 年）

11　愛知県教育委員会『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ(尾張地区)』(平成３年)

12　拙稿「尾張平田城」(東海古城研究会『城』139、平成３年)

13　拙稿「九之坪城私考」(東海古城研究会『城』111、 昭和 59 年)

14　拙稿「熊之庄城（付井関城・鹿田城）」（東海古城研究会『城』125、昭和 62 年）

15　註 14 文献に同じ。

16　註 14 文献に同じ。

17　拙著『小田井城と織田藤左衛門家』(私家版、平成元年)

18　拙稿「大留城と下大留城－尾張における中世城館の一形態－」（郷土文化会『郷土文化』176、平成 8 年。後、学術文献刊行会『日本史学年次別論文集』中世 1 に所収）

19　名古屋市産業部観光課『名古屋の名所旧蹟』（昭和 13 年）

20　当時、筆者が見た石碑の位置は、註２文献 127 頁の写真と同じである。

21　拙稿「小口城の縄張り－古城絵図・古城之図からの検討を中心に－」(郷土文化会『郷土文化』184、平成 11 年。後、学術文献刊行会『日本史学年次別論文集』中世 1 に所収)

22　拙稿「小牧・長久手の合戦における城郭―尾張北部を中心として―」（中世城郭研究会『中世城郭研究』15、平成 13 年）

23　中山春義・井上博史「大草城調査報告」（東海古城研究会『城』83、昭和 52 年）

24　鈴木恵介他『挙母(桜城)跡』(豊田市教育委員会、平成 20 年)。

25　大類伸監修『続古城をめぐる』（人物往来社、昭和 36 年）等。

26　服部氏が明知城（岐阜県恵那市）と紹介される写真の内、232 頁の右上、中左は近隣の千畳敷（落合）砦である。

27　犬山城解体修理前の写真は、春日井市の近藤薫氏より提供頂き、拙著『犬山城残映－絵葉書から見た近代の景観－』（平成 21 年）で活用させて頂いた。

28　髙田徹「愛知県下の城郭関連絵葉書について」　愛知中世城郭研究会、豊田市郷土資料館会議室、平成 21 年８月８日口頭報告

29　拙稿「岩倉城」(中井均監修『愛知の山城ベスト 50 を歩く』、サンライズ出版、近刊)